
幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

げんそうげんえいたん
幻想幻影譚

【Nコード】

N4023Y

【作者名】

みなかみれい
水上 鈴

【あらすじ】

作者が張り切りすぎて、荒ぶった小説。一年がかりで己のすべてをかけて書き上げた妄想と願望の産物。以前某誌で連載していたものを加筆修正して投稿しております。ご了承ください。血が、首が、腕が、足が、陰謀が、魔法が飛び交うカオスダークファンタジー。

第零夜 これがすべての始まり（前書き）

この小説は前置きも容赦もなく、血やら陰謀やらが飛び交います。
ご了承くださいまし。

第零夜 これがすべてのはじまり

それは、どこかの世界、いつかの時代。

科学の光が迷信、人ならざるものを駆逐する前の物語。

未だに人ならざるものが、人々が恐れおびえる闇に闊歩する時代の物語。

灰色の石畳が敷き詰められた広場のすみに

うら若い幼さのこる少女と呼ばれてもおかしくはない盲目の詩人が、
豎琴を片手に黒銀の毛並みの犬を傍らに物語を紡ぐ。

はしゃぐ子供の声を聞くと、詩人は近寄ってきた子供たちに微笑んだ。

いつのまにか集まったあどけない顔を期待に輝かせた子供たちに詩人は問うた。

「どんな物語がいいかしら？お姫様を助けた王子様のお話や、
小さな国を救った英雄のお話もあるよ」

「あのね、私はお姉ちゃんの小さい頃のお話がいいな」

「私の？それじゃあ、くわしくは秘密だけど、
それに近い物語を聴かせてあげましょうか」

詩人はひざに置いていた豎琴を持つ。

「ねーねーはやくう」

「せかしちゃだめだよ」

「楽しみだね」

子供らが口々に騒ぐが年長者と思しき女の子がおとなしくさせる。

「今はただ、目を閉じて聞いておくれ」

これは、淡く儂い小さな幻想^{ゆめ}。

これはとある一人の詩人が紡ぐ、真紅と漆黒に彩られた
どこかおぞましくも古めかしい、そして美しい物語。

さあさ、よってらっしゃい見てらっしゃい。

数多の歴史に埋もれて消えた、
とある男と執事の一代記の一部始終のはじまりはじまり。

もしもし、そのアナタ。

どうか、この物語を聞いてくださいますか？

第零夜 これがすべてのはじまり（後書き）

自分の好きなものを詰め込んだらこうなった。

第一夜（前書き）

好きなものと好きなものを混ぜるともっといいものができると思い込んでいた自分がだめだった。

第一夜

夜明けとともにその人は動き出す。

すべては親愛なる主一人のために。

漆黒の清潔なスーツに袖を通し、

絹を思わせる艶やかな腰まで届く藍色の髪をうなじで一つにまとめ、
ふちのないメガネをかけてほかの使用人を起こしにかかる。

「サーシャ、アリサ、マルコシアス、

セエレ起きてよ。もう時間だよ」

透き通る男か女かもわからない中性的な声で相部屋の住人を起こす。

「もう起きています桜花師匠」

すでに起床し、

身支度をすませた十代半ばの毛先をまつすぐにきりそろえた黒髪の
少女は

無表情かつ抑揚のない声で挨拶する。

瞳は濃い色のサングラスで隠され、表情を読み取りにくくしていた。

「おはようございます。どうも朝は弱くて……じゃないでしょう！
う！」

わたくしたち意外いないからといってもこの名前で呼ぶなと口をす
っぱく……」

カラスの濡れ羽色の毛先を切りそろえた

十代はじめの鮮やかな董色の瞳の少女が朝早くから説教する。

「あー、はいはい。それは聞き飽きたから」

耳をふさぎ、

藍色の髪をした桜花と呼ばれたスーツの彼女はふらりと出て行って
しまった。

「あのきまぐれっぷりにはおどろきます。

つきあわされるこちらのきもちにもなつてほしいです」

窓際には十代後半から二十代前半のこがらな紺色のショートヘアの

青年が

やれやれとばかりにてぶりを交えたため息をつく。

「その話はなしにしましょうセエレ。」

あの自由が服を着ているにいてる桜花の誘いにのった自分たちがバカみたいですが、

これも一興かもしれません。それより、今は一介の使用人なのでそれから」

こうして一日が始まる。

こうなってしまった理由は、

人ならざる者たちである者らが退屈しのぎにと人のふりをして

一介の使用人としてどこか剣と魔法の世界で働いてみようと考えにのってしまったからであつた。

働き始めて早くも数年。

今使えている主がとても気に入つたのでこのまま原炊き続けることにしたのであつた。

第二夜

さきほど、桜花と呼ばれた彼女は子供っぽいしぐさや表情から一変し大人っぽく恭しく丁寧にドアをノックし反応がないことを確認し、音を立てずに開ける。

「坊ちゃん、朝です。朝食をお持ちいたしました」

この館の主であり、

所有者アルフォード家当主ジャン・マリス・アルフォードを起こすことから執事の一日は始まる。

「ん？・・・ああ桔梗か。昨日は遅くまで読書していたから。もうこんな時間なのか」

「そうです。本日の予定は午前はダンスレッスン、午後からは孤児院の寄付と訪問です」

無言で寝ぼけたまま黙々と食べ進める。

食べ終われば地味なベージュのスーツに着替えて楽器が置かれたダンスレッスンの部屋に行く。

数メートル歩いたところで当主の証の指輪とアクセサリーを身につけに戻った。

戻り、たどり着くまでに桔梗はぼんやりと考え事をしていた。自らの主のことを。

淡いプラチナブロンドをのばさずに右側の一房のみのぼし、

青いビーズのようなアクセサリーをつけている。

背丈は小柄なほうでもう18なのに16やそれ以下に見える童顔。

かわいらしく純粋な普段の表の顔と仕事時の慇懃だが

冷徹な笑顔とそうでない笑顔を使い分ける大人な裏の顔を持つ。

やり手で切れ者と評されるが、

アイカシア王国を守る12地方の諸侯の末席であるが故に蔑ろにされることが多い。

そんなことにもめげずにやっていく主の背中が桔梗には眩しかった。

「さあ、本日はこのアルフォード家主催のパーティですから、張り切っていきましょう。」

アリシア、パトリシア、ガイア、アーク

「張り切っていますね桔梗」

早朝にはサーシャと呼ばれていたメイドは、のんきに笑ってみせるが本来の仕事以上の仕事量に疲弊しきっていた。

桔梗こと、桜花以外の使用人たちは

この屋敷で働くことになってから決めた偽名で呼び合うもいまだになれず、

苦労と心労と胃痛の連続の繰り返し。

とくに仲間内で

「自由奔放と悪意ない害意と無邪気な残酷さと知識と戦略に長けた軍師を混ぜたものが服を着ている」と評される桜花は頭痛の種でもあった。

それでも持ち前の頭のよさで幾度となく窮地を救ってくれたことは感謝していた。

が、それもケースバイケース。

いまは皆苦労の原因をつくるなと祈るばかりだった。

第三夜

「なぜ私がパトリシアなのでしょう？」

アリサと呼ばれたメイドは一見涼やかな声で問う。

予定が山積みため、いつもの数倍の仕事量をなんなくこなしているようだ、

疲れがでたのかやや顔が青ざめている。

「アーク（箱舟）なんてネーミングセンスのカケラもない名前ですよ。そっちのほうのマシです」

早朝にはセイレと呼ばれたコックがばやく、それを黙殺する。

やがて本来の持ち場の仕事に取り掛かるうとして、

井戸端会議に花を咲かせていたが別々の方向へスタスタと行ってしまった。

「どうしてガイアなのかよくわかりませんよ。まったく、あの人の思考はわかりませんねえ」

早朝ではマルコシアスとよばれた庭師が痛んだ花を摘み取り、刈り取った植物を焼却処分した。

一通り仕事を終わらせて、自らの両耳横の胸の上まで伸びたふた房の髪の毛を撫で付ける。

目の高さの部分には瑪瑙製の九つの目が描かれた円筒形のビーズが二つ。

いつものところに作られたのか、なんのためのものなのかわからないが唯一己が命を欠けてでも守り通すと決めた者からのささやかな贈り物。

後に腐れ縁の知人から聞いた話によればそのビーズは『ジービーズ』とよばれるものだとは判明した。が、深くは詮索しないことにした。贈り物は贈り物。それで十分だと結論付けた。

「煙が目にしみます」

煙が立ち上る蒼穹を見上げた。

澄み渡る空が高く、気持ちのいい風が吹いていた。

こんな風が吹く日はいい日になると語る友人を思い出して笑みがこぼれた。

この良き日をさらによくするために自分たちはいるのかもしれない
と思いながら、

頼まれていた仕事に取り掛かるべく小走りで屋敷の中に入った。

第四夜

一方、屋敷の大きさの割りに少ない使用人のために執事の桔梗は招待客のリストの照合から、

食材の吟味、会場のホールのセッティングすべてをひとりでこなした。

すべてが終わる頃には夕日が翳り、二頭だての馬車で主が帰ってきた。

「おかえりなさいませ」

「子供たちが意外と元気だね」

頬が紅潮し、楽しそうに語る主を見て目を眇^{すが}め微笑む。

こうして、夜もふけて夜会が開かれた。

この日のためにと呼び寄せた最高の楽団、

仕事の話やゴマすりが見え隠れする紳士の悲喜こもこも、

流行のドレスを身にまとう令嬢や貴婦人、

色鮮やかで食指が動くような食事、気配りの行き届いた使用人、

華やかで心を奪う歌姫の歌声。

すべてが完璧にそろった夜会だった。

一度、詩人は豎琴を置いた。

「今日はもうお帰り。お母さんやお父さんが迎えに来たよ」
ちらほらと子供らの親が迎えにきた。

「もう、暗いもんね。じゃあねお姉ちゃん」

「じゃあね」

にぎやかな集団が去り、夜の帳が下ろされる直前。

「さあ、行きましょうかマルコシアス」

傍らの黒い犬が立ち上がり、先導する。

赤い夕日の照らす道の向こうから小さな子供の足音がした。

「お姉ちゃん、うちに泊まっていつてよ。何も無いけど」

小さな子供をおとなしくさせた年長の子供が戻り、詩人に声をかけた。

「いいの？」

「うん」

「それでは泊まらせてもらいましょう」

こうして詩人は相棒の犬とともに子供の家に言った。

その子供の家は一般的な中産階級に属する家で裕福ともいえないが、貧しいとも言いがたい家だった。

詩人は一宿一飯の恩にと歌を歌った。

櫛の木のいすに深く腰掛け、

身の回りの一切を詰め込んだかばんを足元において豎琴を手取る。

そして、深く息を吸い込むと歌を紡ぎだした。

夕方に中断した歌物語の続きを。

第五夜

詩人が紡いだのは華やかさはないが、あたたかみのある歌だった。歌は大変喜ばれ、その日は子供の部屋で寝た。

寝る前、子供は詩人にいくつか質問をした。

「お姉ちゃんの名前はなあに？」

「私の名前はジュエルっていうの」

「私の名前はねリビエラ。みんなリビーって呼ぶの」

ほかに、ジュエルがどれくらい見えるのか、

どこからきたのか、リビーは次々と質問攻めにした。

質問に答えているうちにリビーは眠りに落ちてしまった。

いつも傍らにある犬とリビーにおやすみを言ってから詩人もまた眠りについた。

朝が来て、朝食をとってからジュエルは旅立った。

リビーは名残惜しそうにぐずるが、母親が何事かを言い聞かせて別れを告げさせた。

詩人はやさしく相棒の頭をなでて歩き出した。

ゆっくりと歩きながら歌を口ずさむ。

やがて人気のないところで豎琴のある弦を

かき鳴らすと一人と一匹の姿が消えた。

ジャンはいつもとかわらない退屈させるような日常が待っていることを信じて眠りについた。

これがすべてのはじまりで、

これから波乱に満ち溢れたいくつさせない非日常が待っているとは

疑いもしなかった。

嗚呼、運命の齒車はどこで壊れ始めたのだろうか。或いはすでに壊れていたのだろうか。

そうだとしたら、いったいだれがそうなるように仕組んだのだろうか。

すべては箱の中の猫と同義である。

第一章「これで時計の針は動き出す」 完結

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（前

ここからが作者の通常営業です。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」

穢れなき白が大地を覆い尽くす季節に無味乾燥な灰色の石畳の街道を一台の箱馬車が通過する。通過する間も音もなく降り積もるそれが馬のひづめの鳴らす音を掻き消す。静寂に包まれた鉛色の空に興味を持たないのか御者は遙か前方だけを見据える。時折、吹きさらば風が駆け抜けていくと同時に粉雪を舞い上げて視界の妨げとなる。ほんのりとあたたかみのある馬車内で手持ち無沙汰で物憂げに窓の外を見やる青年と少年の間の人がこの国のことを考える。

「隣国とこの国の間には巨大な山脈があるからまだいいけど、最近やたらと好戦的になってきた。あと、海賊の略奪行為も頭が痛いし、

・・・」

頭を抱えて悩む人物は馬車の主にしてアイカシア王国の大貴族の末席に名を連ねる、アルフォード公爵家当主ジャン・マリス・アルフォード。一族があまりいなく必然的に当主となった彼は今、政治について悩んでいた。外患内憂とはこのことで非常に危うい均衡の下に成り立っている平和とこの国を憂いていた。この状況を打開せねばと意気込んでいた青いときは過ぎたとつぶやく。そう嘯いてみても意味はないとわかりきっていてもしてしまう。国中が雪に閉ざされるこの季節に国王と十二の地方の管理を任された地方公爵たちの会議のために国王の直轄領である天領にある辺境の館、「星藍玉館」せいらんぎよくかんに赴くところだったのを思い出した。はるか南方でしかとれない、この国では星藍玉と呼ぶ瑠璃をふんだんに装飾に使った屋敷だからそついう名前がついたのだ。みな一様に「館」と呼ぶが、ある種の複合施設と称したほうがわかりやすい。本館が一つの城以上に大きい。本館とは別に会議中に地方公が宿泊するコテージ風の離れが12ある。みな同じつくりで同じ規模なのはある意味で平等で無意味。本館には宿泊しないにもかかわらず各人の部屋まで用意されている。

無駄に部屋数が多すぎて活用されていない部屋や階は膨大にあり、無駄で散財のもとだと考えるものも少なくない。維持費や人件費も馬鹿にならないため、払い下げて孤児院にする案が通り、年が明けてすぐに孤児院として運営されるので使用は今月いっぱいまでとされている。近年戦争が続く、どこも孤児院は孤児たちであふれ苦しい経営状態が続くのでちょうどいいという意見が大多数だった。取り壊すのも惜しいし、博物館にしようとしても首都からは遠すぎるし、維持費を浮かせて軍備に充てたいというのが本音であった。だが、買い取りたいという酔狂な御仁が存在すればと仮定してのことだ。それ以上を議論しても詮無き事だと判断して窓の外を眺めた。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（後

初期よりかなり書き足しました。初期設定では屋敷の名前なんてありませんでした。もうちょっと文章を足してもいいかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023y/>

幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

2011年11月30日16時56分発行